パートナー関係維持方略尺度日本語版作成の試み

○寺島 瞳
(筑波大学)

キーワード: パートナー関係維持方略、ドメスティック・バイオレンス (DV)、操作

Development of Japanese Version Mate Retention Inventory Short Form

Hitomi TERASHIMA

(Univ. of Tsukuba)

Key words: Mate Retention Tactics, Domestic Violence, Manipulation

目 的

ドメスティック・バイオレンス (DV) などに代表される病理的な二者関係に特徴的な問題は、一度成立した関係性から抜け出しにくいことにある。その要因の一つとして、配偶者や恋人を自分のもとにつなぎとめておこうとする行動が関連すると考えられる。Buss(1988)は、恋人や配偶者を自分のもとにつなぎとめておくための方略を測定する尺度として、パートナー関係維持方略尺度 (Mate Retention Inventory) ¹を開発した。恋人を中傷する、脅迫する、監視する、他の男性と会わせないようにする、自分が恋人を所有していることをアピールするなどの行動が含まれている。Buss, Shackelford & McKibbin(2008)により 38 項目の短縮版が開発されている。

先行研究では、男性対象の調査において、パートナー関係維持方略のうち監視や感情操作などの行動は暴力の予測因子となることが明らかにされている (Shackelford, Goetz, Buss, Euler & Hoier, 2005)。よって、暴力につながる行動としてのパートナー関係維持方略について明らかにすることで、関係から抜け出せなくなる前の介入が可能となると考えられる。しかし、日本において、似たような尺度はこれまでにない。よって、まずはパートナー関係維持方略尺度の日本語版を作成する必要がある。そこで、本研究では、パートナー関係維持方略尺度短縮版の日本語版を作成して、信頼性・妥当性を検討することを目的とする。

方 法

調査対象者: 関東圏内のこれまでに恋人がいた経験のある大学生 182 名 (男性 92 名、女性 90 名、平均年齢 19.14±1.66 歳: データ 1) および 149 名 (男性 61 名、女性 88 名、平均年齢 21.93±7.49 歳: データ 2)、全国の一般成人 512 名 (男性 254 名、女性 258 名、平均年齢 38.79±9.74 歳: データ 3)。既婚者 198 名、未婚者 314 名であった。大学生は平成 21 年 6 月・10 月に一斉調査および個人配布による調査を、一般成人は平成 22 年 2 月に社会調査会社を通して郵送調査を行った。

調査内容: 既婚者には配偶者について、未婚者で現在恋人がいる場合は現在の恋人について、現在恋人がいない場合は過去の恋人についてそれぞれ回答を求めた。大学生、一般成人データに共通してパートナー関係維持方略尺度短縮版 (Mate Retention Inventory Short Form: MRI-SF, Buss et al., 2007) を実施した。本尺度は各 2 項目ずつ、19 の方略からなる。0 (一度も行おこなったことはない) 1 (めったに行おこなったことはない) 3 (数回行おこなったことがある) 4 (しばしば行おこなったことがある) の 4 件法である。日本語版の作成には原著者に日本語版作成の許可を得たうえで、バックトランスレーションの手順を踏んだ。その他、交際・婚姻期間 (全データ共通)、青年期用対象関係尺度 (井梅・平井・青木・馬場, 2006) のうち、見捨てられ不安を測定する尺度 7 項目 6 件法 (データ 2, 3)、関係維持動機 (Rusbult, 1998) 交際始め時点 7 項目 (データ 3 のみ)、女性に対する暴力スクリーニング尺度 (片岡, 2005) 加害側に項目を修正したもの、過去 1 年間もしくは交際終わる前 1 年間 7 項目 (データ 3 のみ) を実施した。

¹ 直訳では配偶者確保方略となるが内容が分かりやすいように命名した。

結 果

Table1 に、19 方略の男女別の項目平均値・標準偏差と性別による *t* 検定の結果を示す。Buss & Shackelford (1997) における 214 名の夫婦対象の調査における平均値とほぼ同様の傾向であったが、資源のアピール、外見の改善、愛情とケア、行動での所有のアピールにおいては平均して 0.90 ほど米国データの方が本研究よりも高かった。一方で服従、パートナーの価値下げにおいては平均して 0.50 ほど本研究のデータの方が米国データよりも高かった。性差に関しては、本研究のデータの方が多く見られた。

信頼性検討のため、項目・全体相関を算出したところすべての項目において .24～.62 の範囲で項目の合計得点と正の相関がみられた。*a* 係数を算出したところ、尺度全体で *a* = .90 と高い値が得られた。妥当性の検討のため、関連が予想される変数との相関係数を求めた結果、交際・婚姻期間においては一般成人のデータでは相関は見られなかったが、その他は交際・婚姻期間 (大学生 *r* = .25**), 見捨てられ不安 (*r* = .12**), 関係維持動機 (*r* = .27**), 相手への暴力 (*r* = .23**) で予想どおり正の相関がみられ、妥当性が確認された。よって、パートナー関係維持方略尺度の信頼性・妥当性が確認された。

考 察

以上の結果より、本研究で作成したパートナー関係維持方略尺度日本語版は十分な信頼性と妥当性を持つことが示された。しかし、尺度の特性上予想していたことであるが、平均値が低く得点が正規分布していないため、分析の際に留意する必要がある。また、大きな文化差はなかったが服従、相手の価値下げなど相手との上下関係を反映した方略が日本において平均値が高かったことは注目に値する。今後も本尺度を用いてより詳細に検討していく必要がある。

Table1 パートナー関係維持方略の平均・標準偏差と性差

方略	男性		女性		<i>t</i> 値
	M	SD	M	SD	
警戒	0.41	0.57	0.51	0.67	-2.33 *
パートナーを隠す	0.57	0.66	0.43	0.63	3.11 **
時間の独占	0.62	0.70	0.56	0.71	1.26
嫉妬の誘発	0.34	0.59	0.52	0.70	-4.01 **
不義への罰	0.34	0.55	0.56	0.70	-4.97 **
感情操作	0.65	0.83	0.59	0.84	1.02
関係操作	0.72	0.77	0.58	0.71	2.82 **
ライバルの価値下げ	0.23	0.45	0.17	0.38	2.27 *
資源のアピール	0.88	0.79	0.56	0.61	6.45 **
性的誘惑	0.98	0.91	0.73	0.83	4.23 **
外見の改善	0.91	0.69	1.17	0.73	-5.32 **
愛情とケア	1.78	0.87	1.62	0.89	2.50 *
服従	1.47	0.76	1.34	0.83	2.25 *
言葉での所有のアピール	1.01	0.84	1.27	0.87	-4.27 **
行動での所有のアピール	0.65	0.72	0.76	0.72	-2.15 *
装飾品による所有のアピール	0.54	0.69	0.39	0.59	3.49 **
パートナーの価値下げ	0.53	0.77	0.80	0.90	-4.55 **
同性への脅し	0.23	0.52	0.12	0.39	3.41 **
ライバルへの暴力	0.10	0.32	0.02	0.13	4.36 **

注) 平均値は項目数で割っている

(Hitomi, TERASHIMA²)

² 本研究は、平成 20 年度科学研究費補助金若手研究 (スタートアップ) (研究代表者 寺島瞳、課題番号 20830011) による助成を受けた。